パストラルを超える物語としての『従妹フィリス』

木村　晶子

田舎牧師の一人娘の失恋を描いた中篇『従妹フィリス』(1863-64) は、エリザベス・ギャスケルの作品の中で最も形式的完成度が高いと評されてきた。我が国でも、既に昭和 23 年に『田園抒情歌』と題された海老池俊治の邦訳が新月社の英米名著叢書の一巻として出版されており、のどかな田園生活や美しい乙女の恋など、パストラルの伝統を継承した抒情性が読者の心をとらえたと思われる。

パストラルは、紀元前 3 世紀頃のギリシャの詩人テオクリトスが都会アレクサンドリアで故郷シチリア島に対する望郷の念を込めて田園や羊飼いを主題にして創作した牧歌に遡り、その継承者である紀元前 1 世紀のローマの詩人ウェルギリウスの『詩選』によって、繊細な情緒を自然の風物に託すジャンルとして確立された。テオクリトスは羊飼い達の歌の競い合い、報われぬ恋の嘆き、恋人の賛美、仲間の死の悲しみを歌ったが、ウェルギリウスは実際の羊飼いよりも都会人の田園への憧れや自然と人間が調和していた黄金時代を多く描き、その結果としてルネサンス期のパストラルは風刺や寓意の手段ともなった。英国では 1579 年のエドマンド・スペンサー『羊飼いの暦』と 1637 年のミルトン『リシダス』が、その伝統を継承した作品である。愛する者の死の悲しみを扱ったエレジーとしての『リシダス』のパストラルの要素は、19 世紀でもシェリーやマシュー・アーノルドに引き継がれるが、18 世紀後期には、同じく田園賛美を含みつつも実際的な農業の知識を含む農耕詩やロマン派の田園詩の流行によって、パストラル自体は衰退したとされる (Baldick 162-63)。

とはいえ、パストラル喜劇、パストラル小説など、パストラルはジャンルというより文学的手法としても捉えられる。ポール・アルパースは作者の意識や主題にパストラルの特色がある場合にはパストラル小説としているが (375-76)、テリー・ギフォードは伝統的文学形式としてのパストラル以外に、都会と対比して自然を賛美する第二義のパストラル、更には現実味を欠いた田

園の美化という、否定的な意味の第三義のパストラルを挙げる（1-2)。

確かに、素朴過ぎる人間観や過度に感傷的な死生観をパストラルに見出すこともできるが、都市化・工業化が劇的速度で進行したヴィクトリア朝においては、都会と田園の対比、田園への郷愁を描くパストラルが新たな小説の技法となったという議論もある。[1]このような視点で、マイケル･スクワイアーズはジョージ・エリオットやハーディの小説を分析し、シーラ・ハンターはヴィクトリア朝の牧歌的小説としてエリオットやハーディの他、ギャスケルの作品も取上げている。ハンターは、パストラルがこの時代に新たな変貌を遂げ、伝統的価値観と新たな社会変化の対立によるプレッシャーを描く戦略となったと考え、過去の世界を尊重しつつ現在の不可避な変化を認め、過去と現在の価値観を共存させた作品として『従妹フィリス』を分析する。変化の記録者としてギャスケルを評価するハンターは、『従妹フィリス』において田園という昔ながらの平穏な空間・時間と、変化し続ける現在が対峙しつつ交錯し、独特の均衡を保っている点に注目する(77-119)。確かにヴィクトリア朝的パストラルにふさわしく、この作品は、鉄道敷設による劇的変化の中で、語り手の回想という形で田園の恋物語を美しい織物のように綴っている。

しかし、伝統的パストラルを強く意識したこの作品には、パストラルとは相容れない、あるいはその枠組に収まらない人物像や主題があるように思えてならない。小論では、この作品をヴィクトリア朝的パストラルとしてより、作者独自のパストラルを超えた物語としてとらえ、パストラル的空間と時間の加工に注目したい。つまり、パストラル的な物語設定と人物像が踏襲されつつも、女性作家ギャスケルならではの主題や女性像によってその枠組が壊れる点にむしろこの作品の魅力があると考える。その際にはヒロインと言葉の関係、病などの身体表現、日常性の獲得という 3 点からパストラルとの違いに注意を払う。ギャスケルは絶えずジャンル横断的作品を描いたが、この作品もやはりその例にもれないと言えるからである。

1. パストラルとヒロイン

題名『従妹フィリス』からも、作者がパストラルを意識していたことは明らかである。フィリスは、ギリシャ神話ではアテネ王の妻として悲劇的な死を遂げ、その場にアーモンドの木が生えたという伝説の女性で、英国では 16 世紀以降「田舎の美しい乙女の名」「パストラルで多用された名」（*OED*）だった。鉄道

技師の助手という近代的職業に就いた語り手ポール・マニングによる、田舎暮しの従妹フィリスの描写という設定自体が、都会での田園への憧憬という牧・歌の抒情性を漂わせている。

父ホウルマン牧師の影響で、フィリスも「ウェルギリウスがずっと大好きだった」(391) ことにもパストラルの要素が見出せる。ホウルマン牧師の人物造型にはギャスケルの父の影響があるが、道徳的指導者であるだけでなく、旺盛な知的好奇心と実践的知識をもつホウルマン牧師は、時代の変化を意識しつつも都会的な退廃とは無縁の田園生活を送る点で、ヴィクトリア朝の理想的な生き方を体現している。

彼の経営するホープ農場は、ギャスケルが 25 歳の頃の 1836 年に滞在した、ナッツフォード近郊サンドルブリッジの親類宅がモデルだとされている (Stoneman 106, Uglow 541-42)。同年 5 月 12 日の彼女の手紙には、「一番近い町から 5 マイルも離れた田舎」サンドルブリッジの風景の美しさと「ワーズワスを読むにはぴったりの場所」であることが記されている (*Letters* 6-7)。工業都市マンチェスターから離れることは、生涯ギャスケルの切実な願望だったが、若き日の理想郷が長い年月を経て作品の舞台となった点にも、彼女自身の田園への憧憬の強さが感じられるだろう。

ワーズワスはパストラルを超えた独自の自然観に立脚した詩人だが、ギャスケルにとっては理想的田園風景やパストラルと深く結びついていた。『従妹フィリス』におけるワーズワスのルーシー詩篇の引用は、パストラルのヒロインとしてのフィリス像を強調する。ポールの上司で若き鉄道技師ホウルズワスが一家と親しくなるにつれ、フィリスは自然の中で「嵐から守られ、人里離れた茅屋の日なたで花開いたバラのように」美しく輝き、ポールはその姿に、「称える者なく、愛しむ者少なかりし乙女」というルーシー詩篇の描写を「常に思い出す」のである (426)。詩人の視点から、今は亡き、隠れ里の乙女への想いを望郷の念と共に詠ったルーシー詩篇同様に、『従妹フィリス』でもポールの視点のみからフィリスが描かれ、彼女の内面は一切表現されない。また、フィリスと息子の結婚を望むポールの父マニング氏が、青春時代に愛した女性、モリーの思い出を息子に語る点も注目に値する。彼が出稼ぎで不在の間に、恋心を伝える間もなくモリーは亡くなっており、まさにルーシーと同じ運命をたどっていた。マニング氏によれば「モリーそっくりの目をしている」(398)フィリスは、モリーを介して更にルーシー像と重なると考えられる。

ギャスケルはワーズワスの道徳観に深く共感していたが、その一方でフィリスとルーシーの類似と相違には女性作家ならではの視点が認められる。ロマン派の男性詩人の視点を批判的に考察するフェミニズム批評では、ワーズワスの女性像の主体性の欠如も槍玉にあがっている。例えば「ルーシーを含む初期の詩の女性達は自立した意識をもつ人間ではなく、ルーシーのような実際の死者か、または比喩的な死者であるに等しい」(Mellor 19) という指摘や、ルーシーは「絶えず他者によって作られ、支配され」、「恋人や自然によって美の対象として認識されるだけの存在だ」(Page 25) というのである。確かに、詩人のみに愛され、死を悼まれるルーシーは、死者という形で詩人の思い出の中にしか存在しないと言える。

だが、ルーシーは牧歌的ヒロインとしてのフィリスのイメージを強調し、死の影を重ねつつも、同時にフィリスが決別してゆく女性像として意味をもつと考えられる。ポールがルーシーにフィリスを重ねつつも、「でもその詩句はフィリスには当てはまらないとも言える」(426) と続けるように、その違いこそが重要となる。フィリスは、カナダに行ったホウルズワスの結婚相手がルシーユと聞いて「英語名ではルーシーね」(430) と言うが、彼がフィリスに惹かれた理由はその個性ではなく、「ルーシー的なタイプ」(Stoneman 109) だったという指摘にも頷ける。ルーシー詩篇の引用は、ギャスケルのワーズワスに対するオマージュとしてパストラル的原型のイメージをフィリスに与えるが、次第に男性の主体によって対象化される存在でしかないルーシーやパストラルの乙女とフィリスの実像の違いが明確になってゆく。『従妹フィリス』はワーズワスのルーシー像を喚起しつつも、それを超えるヒロインを描くことによって、パストラルの枠組を超える作品と言えるのではないだろうか。

2. 読書と言葉とヒロイン

フィリスが読書家であることは、さらにパストラルの乙女とは異なる知的ヒロイン像を鮮明にする。ウェルギリウスやギリシャ語文法の本すべてにフィリスの名前が記してあるのを見て、ポールは仰天する。背が高く、台所仕事の合間にイタリア語の辞書を引きながらダンテを読むフィリスの姿からは、同じく台所で家事を手伝いながらドイツ語を読んでいたエミリ・ブロンテが思い出され、男性の視線の対象となるだけの乙女とは異なる女性像が浮かぶ。自然の中に溶け込む純朴な乙女というポールの初めのフィリス像は、知識欲旺盛な読書

家とは相容れない。ポールは、彼女のように自分より「ずっと背が高くて頭がいい」(399) 女性とは結婚したくないと語るのである。

皮肉なことにフィリスの主体性を示す読書と知識欲が、ホウルズワスに惹かれる一因にもなる。彼はイタリアで仕事をした経験があるためイタリア語に堪能で、その見事な話術と豊富な知識は、「まるで美酒を飲むように」(409) フィリスだけでなくホウルマン牧師をも魅了する。ホウルズワスが、フィリスにアレッサンドロ・マンゾーニの最高傑作とされる 1827 年の歴史小説『婚約者』を与えるのも意味深い。牧師は娘が小説を読むのを嫌がるのではないかと危惧するポールに対し、ホウルズワスは「あんなに美しくて無害な話はないよ。まさかあの親子がウェルギリウスを絶対的真実と崇めているわけでもあるまい」(408) と答えるが、牧師は「約二千年も前のイタリアで、英国の村の今の現実にも合う表現を生み出した」(384) ウェルギリウスの偉大さを絶賛していた。近代イタリア標準語を完成したとされる小説『婚約者』によって、彼女は父が支配する古典的なパストラルの空間とは異質の、新しい活気に満ちた世界と出会うと解釈できるだろう。

フィリスは、ルーシーと重なる無垢な女性でありながら、男性の客体としてのみ存在するパストラルの乙女ではなく、知識欲をもつ主体として描かれるが、それは理想的な田園生活を送る父親像を模倣する娘でしかない。もともと彼女の読書は父の影響で、父との共通点が再三強調されている。「母親より父親似の骨格」(382) で「精神的にも肉体的にも父そっくり」(386) の彼女は、父の「果てしなく旺盛な知識欲」(388) を共有する。ホウルマン牧師は決して専制的な父親ではないが、「おしゃれは虚栄」(392) と考える彼に対して、フィリスはリボンを欲しいと思う気持を抑えるしかない。ポールが違和感を抱いた初対面のフィリスの子供じみたエプロン姿からは、「まるで娘の女性としての成長に気づかなかったような」(439) 親の心情が窺える。フィリスも父と同じくホウルズワスに惹かれるが、知識欲が恋愛感情に変わる点で、初めて父とは共有できない欲望を抱くのである。

本だけでなく、言葉の使い方自体においても、ホウルズワスと牧師はまったく異なっている。「深い意味もない主張や大げさな表現によって、牧師を一、二度不愉快にさせるところだった」と気づいたホウルズワスが、「他人に影響力を示すためではなく、自分の考えを表すという非常に健全な言葉の使い方の実践」(407) を目指す点には、両者の違いが読み取れる。つまり、牧師にとって心情

や思想の正確な伝達手段である言葉は、ホウルズワスにとっては多分に他者への自己顕示の手段であり、言葉の誠実さは彼本来の言語表現にはなじみのないものだった。パストラルが田園への郷愁と共に、純朴な感性と素朴な情緒の表現を称揚するのに対し、ここではホウルズワスによって内面と言語表現のずれが生じ、作品全体に言葉と真実の幾重もの微妙な関係が描かれてゆくことに注目すべきだろう。

父の言葉の世界で育ったフィリスは、ホウルズワスの機知に富んだ冗談を理解できない。フィリスをからかうホウルズワスに真剣に反論する彼女に、彼は低い声で何かを囁き、彼女を赤面させる。この場面からは、うぶな乙女に惹かれるホウルズワスと、イタリア的な誇張された愛情表現に慣れた、未知の世界からの訪問者の言葉に翻弄されるヒロインの姿が浮かぶ。彼の言葉の軽薄さに対する牧師の危惧は、娘への軽々しい愛情表現に留まらず、父親が予期せぬ深刻な形で一家に打撃を与えてしまう。とはいえ、ホウルズワスだけが口説き上手の悪者とも言えない。フィリスとの結婚を意識しつつも、その浅薄な気質によって次第に異国の寂しい環境で「フィリスに似た」(427)〈もう一人のルーシー〉へと彼の心が移るのは自然な展開に思える。

多くのギャスケルの作品で嘘や秘密はプロットの要となり、言葉の誠実さが重要なテーマとなるが、この作品もその点で例外ではなく、乙女の悲恋の物語は、語るべきこととそうでないことを問う道徳的問題を問う物語となる。ホウルズワスが去って意気消沈するフィリスを慰めたい一心で、彼から聞いた結婚の意志をポールが彼女に伝えてしまうことで、ホウルズワスの言葉の不実さは、ポールの軽率な言葉の問題に転換される。これまでの長篇では真実を隠すことが罪の意識や苦悩の源だったのに対し、ここでは善意から事実を語ることがかえって相手を不幸にする。ホウルズワスが悪びれもせずに手紙でカナダから結婚報告をする時点で、牧歌的な恋の物語は暗転してしまう。フィリスは「あなたは全然悪くないってことを忘れないで」(430) とポールを気遣うが、「農場の庭では、なんと全てが平和に見えるのだろう！」(429) と、激しい良心の呵責にかられるポールの心情とパストラル的風景とは乖離してしまう。突然の結婚報告に驚く両親に対し、心痛を隠して無理に会話を続けるフィリスに話を合わせながら、ポールは「言いたいことがあれば何でも言い、黙っていたければ黙っていられた」、「嘘偽りなど聞いたことのない幸せな家庭」(436) の言葉の雰囲気がまったく変わってしまったと嘆く。

しかし、フィリスは本当に「言いたいことがあれば何でも言えた」のだろうか？ 十代後半という同年代ながら、家を出て自立し着々と仕事を学ぶポールと、知識欲をもちながらも家庭以外の空間を知らずに家事をこなすフィリスとは、既に対照的な人生を歩んでいる。語るべきでないことを語る過ちを犯したポールとは逆に、フィリスは恋の苦しみを語れずに病んでゆく。失恋の悲しみを隠し続ける点で、フィリスもまた他の作品の主人公達と語れない苦しみを共有する。「他の男の恋を語って、清らかな乙女心を傷つけた」(439) と、牧師がポールを責めると、フィリスはポールをかばって「あの方を愛していたの、お父様！」(440) と初めて告白する。ホウルズワスから愛を告白されたのかという父の問いに、「いいえ、一度も」(440) と彼女は答えるが、単なる失恋ではなく、愛を告白されていない男性に愛情を抱くという、当時の淑女にとっての恥辱こそが病気の原因だとストーンマンは述べる (110)。また最早言葉が父娘にとって意味を持たなくなり、傷ついた父の酷な発言で、娘は一時的錯乱というコミュニケーションを断つ世界に逃げるというテレンス・ライトの分析 (161) はもっともに思える。フィリスの悲惨な形での自己表現によってパストラル的雰囲気は消滅し、言葉では語れないヒロインのセクシュアリティと身体が、病という形で描かれてゆくのである。

3. ヒロインの身体

作品の後半では、フィリスの病という形でパストラルには見られない女性の身体とセクシュアリティが表現されている。失恋による病で生死の境を彷徨いながらも快復するフィリスは、恋人が不在の間に亡くなるワーズワスのルーシーや、恋人が行方不明になって正気を失うロマン派的女性像とは異質のヒロインになり、[2]『従妹フィリス』はパストラルの重要な要素である死者を悼むエレジーとは異なって、乙女の新たな成長をたどる物語へと展開する。

ポールの視点から語られるこの作品では、常にフィリスは客体でしかないが、第１節で引用したパストラルの乙女のような初期の彼女の外見の描写が、身体的変化を気遣う記録へと変化してゆくのは興味深い。ホウルズワスが突然去ってから「顔色が悪くやつれて」(418)、風邪をこじらせ「青白い顔色、物憂い眼差し、痩せた体」(421) で泣くフィリスを見て、ポールは彼女の恋に気づく。ホウルズワスの結婚の意志をポールから聞いたフィリスは「この上ない幸福感」で涙ぐみ、笑顔になって頬を赤らめるが、「僕への感謝以上の気持が顔に出るの

を恐れるかのように、慌てて抑える」（423）のだった。セクシュアリティのあからさまな描写はないが、ギャスケルはこの場面に至るまでにも当時の文学的慣習に従って彼女が頬を赤らめる描写（blushing）を多用している。ポールが「彼女のはにかんだ様子を一度も見たことがなかった」（403）のにひきかえ、ホウルズワスに対する彼女は、初対面からそれ以降も再三、顔を赤らめる（403, 404, 405, 408, 412, 413）。ホウルズワスに何かを囁かれて赤面するという先述の場面のように、顔色の変化によって、彼女が純朴でありながらも無垢な子供時代を失ったことが示唆されるのである。[3]

また、ホウルズワスの結婚を知ってからのフィリスは、手芸の途中で癇癪を起して両親を驚かせ、「灰色の目の周りには隈ができ、目の奥は不気味に暗く光っていた。頬は赤らんでいるのに、唇は血の気がない」（437）状態となる。病に倒れるまでのこうした不健康な兆候が、抑えられた情念の激しさを想像させる。彼女に限らず、自発的な恋愛感情の表現ができなかった当時の女性にとって、病は抑制された感情の身体的表現でもあった。娘の恋の告白に動転した父に責められ、フィリスは「お父さん、頭が！頭が！」（441）と呻いて倒れ、脳炎（brain fever）に罹ってしまう。単に失恋の苦しみよりも、父との信頼関係の崩壊が引き金となり、恥とされた心情の吐露の代償が病だったに違いない。脳炎は現代医学では用いられない病名だが、18 世紀末には激しい頭痛や譫妄状態、不眠などの症状を呈する脳の炎症の通り名として既に広く知られていた。突然の発症と長い闘病期間という点が特に文学表現に適しており、心理的要因が身体的症状と結びつくことから数々のヴィクトリア朝の作品に用いられたという。[5]ギャスケルにとって、脳炎やその他の突然の病は劇的展開の手段であり、この作品の他にも『メアリ・バートン』から『妻たちと娘たち』のヒロインに至るまで、病の克服による女性の新たな成長が描かれている点は注目に値する。

ポールが扉の隙間から見る、頭を湿布で覆われて呻くフィリスの姿が、当時のリアリズムにおける病人の身体描写の限界だっただろうが、病むことでフィリスは初めて作品の真の中心となるとは言えないだろうか。病者は究極の弱者である一方で、その弱さゆえの強い影響力をもつ。彼女が生死の境をさまようと父親は「娘のこと以外は何一つ考えられず」、妻と共に看病にかかりきりとなり、「まるで太陽が雲に隠れたように近所のあらゆる人々が悲しみ」（442）、村中が彼女の病状に一喜一憂する。恋を失っても人々の深い愛に恵まれている彼女にとって、語れなかった精神的苦痛を肉体的苦痛に変え、それを克服するこ

とが再生の契機となる。また、かつて解雇した知的障害者ティモシーが、フィリスの安静が荷車の騒音で妨げられないように道で見張りを続けたと知って、牧師は自分の傲慢さを悔い、彼を再雇用する。病を通して、父もまた他者との関係を新たに見直すのである。

とはいえ、両親の愛情深い看護だけではフィリスは真に快復せず、体力が回復しても「常におとなしく、静かで悲しげで」(446)、気力は戻らない。ここで重要な役割を果たすのが一家の家政婦のベティである。最後にこの点に注目しつつ、パストラルと時間の流れについて考えたい。

4. パストラルを超えて

ギャスケルの作品ではしばしば召使が主人公を助ける重要な人物となるが、フィリスもベティの言葉で立ち直る。快復期に入っても物憂げに横たわるフィリスに対して、両親も医師も全力を尽くしたのだから甘えを捨てて元気になるべきだとベティは叱咤激励する。母親ホウルマン夫人が娘の恋心に少しも気づかず、善良ではあっても無力なのに対して、ベティはその現実感覚と観察力によってフィリスの秘めた恋心を見抜き、ホウルマン夫妻が「目の前で娘が大人の女性に成長しているのに、まだ赤ん坊のようにしか思っていない」(433) ことにも気付いている。また、フィリスが生死をさまよう中、牧師仲間が訪ねてきてホウルマン牧師に娘の死を受け入れるように説くと、ベティは以前も深刻な神学談義が満腹によって収まったことに触れ、「ハムエッグを作ってもてなせば、旦那様を悩ませなくなるでしょう」(444) と語る。

多分に散文的なベティの存在によって、この作品には確かな日常感覚がもたらされる。日常感覚は過去への拘泥を捨てて現在の日々を生きることで養われる。過去の思い出の美化や死者への哀惜がパストラルの特質であり、そこではノスタルジアという形で時間が逆行するとすれば、神学論議をハムエッグで収められる「今、ここ」の世界への転換にこそ、ギャスケルのパストラルを超える物語の真骨頂があるのではないだろうか。ベティの言葉で目覚め、自ら快復を願うことによって、フィリスは恋に翻弄されて命を落とす悲劇的ヒロイン像から真に脱却すると言えるだろう。

時間という観点から更に考えてみると、ここでは、都会と田園、慌しい現在と穏やかな過去の時の流れというパストラル的対比がありながらも、その境界が危いのに気づく。ギャスケルは度々鉄道開設による変化を描くが、着々と鉄

道建設を進めるホウルズワスとポールによって象徴される近代は、ホープ農場という伝統的農業社会が保つ過去の時間と対比される。だが、後者はパストラルのアルカディアではあり得ない。なぜならば、ポールが最初に訪れた頃は「静かで単調な時間の流れに、まるで永遠に生きるような気持になる」(390) パストラル的空間だったホウルマン家は、ホウルズワスの結婚報告の手紙が届いた後には「階段の時計が見えないながらもチクタクと時を刻む音」(429) ばかりが響く不安な空間となり、残酷な変化の渦に飲み込まれるかに見えるからである。ホウルズワスのホープ農場への登場は、フィリスを傷つけただけでなく、パストラル的世界をおびやかす近代の力を顕在化させたとも解釈できるだろう。アン・コリーは、仕事で移動し続けるホウルズワスやポールだけでなく、ホウルマン牧師でさえ変化を知るために土地を視察していると指摘し、人物も物語の舞台も常に変化、成長することをギャスケル文学の特色ととらえている (83-98)。

フィリスもまた、病を克服することで更に成長する。ポールの両親のもとで気分転換を図れるかと尋ね、「そうすれば昔の平穏な毎日に戻れるわ。きっとそうできるわ。そうしないとね」(446) というフィリスの言葉で作品は終わる。自らの意志を表現できるヒロインの姿と解釈できるが、実はこの作品には連載の長さの制約で不可能になった別の結末があった。その結末では、既婚者となったポールが農場を訪れると、フィリスは二人の孤児を養子として育て、亡き父の遺した資料を使って沼地の排水を農夫達と行っている (Uglow 552)。ウェルギリウスの農耕詩における排水作業の必要性と、育児という女性の創造性に着目して、この結末をパストラル的とする批評もあるが (Collin 40)、むしろそこには恋愛とは違う他者への愛情を実践的に示す形での自己実現が読み取れる。余韻の残る実際の結末では、まだフィリスの脆弱さが感じられるが、採用されなかった結末は経済的にも精神的にも自立した女性像を示し、女性の成長の物語としての意図を明白に表している。時代の変化に翻弄されつつも、愛に満ちた建設的な他者との関係を築いて現在の瞬間を生きることこそが、ギャスケルの脱パストラル的物語のメッセージだったと言えるだろう。

注

1　20 世紀の最も有名なパストラル論、ウィリアム・エンプソンの『牧歌の諸変奏』(1979)は「複雑なものを単純なもので表現する」(22) ことを牧歌的方式とし、

洗練された言葉で素朴な人々に普遍的な感情を表現させるパストラルを労働者階級の生活を描　いたプロレタリア文学として拡大解釈している。

2　ウィリアム・クーパーの詩「狂女ケイト」(1806) が代表的な狂女像である。

3　R・B・イーゼルは、女性の言葉や仕草がうまく抑制される程　“blushing” が効果的になり「純潔さ自体よりも、それが失われる誘惑的瞬間、つまり女性が無垢で無意識な状態と性的意識をもつ状態が束の間だけ溶け合う瞬間の魅力を示す」と述べているが (74-76) 、これはフィリスにもあてはまるだろう。

4　“brain fever” は現代では脳炎や髄膜炎らしき症状だが、過労や睡眠不足、過度の勉強などの他、神経に激しいショックを与える不安や恐怖、失望が原因とされた (Peterson 445-64)。

引用文献

Alpers, Paul. *What Is Pastoral?*　Chicago: U of Chicago P, 1996.

Baldick, Chris. *The Concise Dictionary of Literary Terms*. Oxford: Oxford UP, 1990.

Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Cambridge MA:Harvard UP, 1967.

Colley, Ann C. *Nostalgia and Recollection in Victorian Culture.* Basingstoke: Macmillan, 1998.

Collin, Dorothy W. “Strategies of Retrospection and Narrative Silence in *Cranford* and *Cousin Phillis.*” *The Gaskell Society Journal* 11 (1997): 25-37.

Empson, William. *Some Versions of Pastoral*. London: Chatto & Windus, 1979.

Gifford, Terry. *Pastoral.* London: Routledge, 1999.

Hughes, Linda, ed. *Cousin Phillis*. By Elizabeth Gaskell. *The Works of Elizabeth Gaskell.* Vol. 4. London: Pickering & Chatto, 2006.

Mellor, Anne K. *Romanticism & Gender.* New York: Routledge, 1993.

Page, Judith W. *Wordsworth and the Cultivation of Women.* Berkeley: U of California P, 1994.

Peterson, Audrey C. “Brain Fever in Nineteenth-Century Literature: Fact and Fiction.” *Victorian Studies.* 19.4 (June 1976): 445-64.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell.* Manchester: Manchester UP, 2006.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. New York: Farrar Straus Giroux, 1993.

Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: “We Are Not Angels”: Realism, Gender, Values*. Basingstoke: Macmillan, 1995.

Yeazell, Ruth Bernard. *Fictions of Modesty: Women and Courtship in the English Novel.* Chicago: U of Chicago P, 1991.